

現地を訪問して想うこと

西山 慶司

「データで見る福島復興状況」¹のいくつかの項目については、震災前の指数に概ね回復しており、その指数をすでに超えているものも散見されている。しかしながら、その数値は一面的なものであり、この数値にもとづく復興支援の成否判断は必ずしも正しいとはいえない。

他方、福島県が有する豊かな自然、伝統的な工芸品、新鮮な農産物といった地域資源は、訪れることでその魅力を実感することができ、これらの情報は、できるだけ多く伝達されることを期待するものである。

そこで、今後の復興支援のポイントとして、情報の「共有化」と「ネットワーク化」をあげておきたい。共有化とは、復興状況のデータだけでなく、福島県の魅力も共有することである。ただし、共有化のみでは、情報が好感的に広がることにつながらないおそれがあることから、その情報をネットワーク化することが必要である。今回の東北応援ツアーは、この「共有」と「ネットワーク」を具現化したものであった。

訪問した川内村、三春町、磐梯熱海温泉、裏磐梯五色沼、猪苗代町は、それぞれ再訪してほしいという人的コミュニケーションの継続を求めているのではないだろうか。「元どおりになる」だけでなく、「再び盛んになる」という意味合いをもつ復興は²、共有化とネットワーク化を通じて、支援に貢献できるものと考えられる。

最後に、講演者の遠藤雄幸川内村長及び飯塚俊二福島県企業局長、寄付して頂いた松井大輔選手、馬場幸蔵幹事長をはじめとする福島県校友会及び復興支援委

員の皆様、大学校友会事務局の関係者、その他、一人一人お名前をあげることは差し控えさせて頂くが、この場を借りて深く感謝したい。

¹ 参照、『ふくしま復興のあゆみ（平成26年10月1日版）』、福島県ホームページ（<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11015b/fukkoukeikaku1151.html>）。

² 飯塚智規（2013）『震災復興における被災地のガバナンス』芦書房、8頁を参照。なお、2014年10月は新潟県中越地震から10年、2015年1月には阪神・淡路大震災から20年という節目を迎える。この点からも、復興のあり方について、改めて考える必要があるだろう。